

荷^{Ka}風^{Fu}へ、
ようこそ

持田叙子

Nobuko Mochida



荷風の随筆「砂糖」で賞美される、クロード・モネの絵画《午餐》(1872年、オルセー美術館)
純白の卓布に斑をなす光線描写の妙にも、荷風は目を留めている。

●—— Photo RMN (Musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / amanaimages



『おもかげ』挿入写真より。大久保余丁町の永井邸と庭。芭蕉や蓮など中国種の植物が多い。
『三田文学』主幹の頃、荷風はここを文化サロンとし、秘蔵の浮世絵鑑賞会など行った。

目次

荷風へ、ようこそ

3

おうちを、楽しく

7

Kafu's Sweet Home

荷風と、ティー・ブレイク

55

紙よ紙、
我われは汝なんじを愛す

93

Papier, papier, comme je vous aime !

封印されたヒロイン

137

レトリックとしての花柳界

183

戦略としての老い

223

荷風蓮花曼陀羅

265

永井荷風略年譜

307

主要参考文献

315

あとがき

321

荷風へ、ようこそ

荷風へ、ようこそ。この頁を開いた方は、すべて〈荷風〉へのお客さま。

さあまずは今からおよそ九十年前。亡きお父さまから彼が譲り受け、その想い出を大切に深く愛し丹精した庭から、〈荷風〉へと入ってゆきましよう。

どうぞそのまま、ずいっと——その柴折戸しおげどを押して中へお入り下さい。大久保余丁町おちようまちのこの樹の多い庭と古い家は、若き荷風が意気込んで理想的なシンプル・ライフを実践しようとした拠点でもある。天皇制国家の歯車として家長の支配する、上下関係厳しいイエでなく。樹々や花に彩られ生きる歓びに充みちた、明るくフラットなイエを創つくろうとした出発の地です。

あ、足元お気をつけて。雨あがりです苔が濡れています。緑のいい匂い、この大久保あたりはまだまだ田舎、静かでございますましよう？

しかしちよつと変わった、エキゾティックな庭ですね。あそこにウチワのような大きな葉を広げているのは芭蕉でしょう、蓮や大明竹の鉢物もある。お父さま好みの中国種の植物が多いので、鬱蒼とジャングルみたい。少し手入れも行きとどいていないのかな、まあこれはこれで趣があります

けれど。

そして、お花がいつばい、何て甘い香り……水仙、沈^{じん}丁^{ちやう}花^げ、連^{れん}翹^{ぎやう}、春蘭、ヒヤシンス、桃の花、桜草、ふくらみかけた牡丹の蕾も可憐な。花壇の向うがやつと母屋ですな。

あ、あの二階の欄干^{らんかん}にもたれてほんやりしている人、あれ荷風じゃないですか。のん気だなあ。世間では先々月来チフスにつづいてペストが流行、日比谷で開かれた内閣弾劾国民大会には軍隊が出勤して群衆に抜刀し、大問題に。たしかこの年の夏には、第一次世界大戦も始まりますのね。それにしても、何をながめているのかしら、夕映え、春の富士山、それとも軒にかかった蜘蛛の巣。ごいっしょに二階へ、行ってみましょうか——？

おうちを、楽しく

Kafu's Sweet Home

永井荷風というとまず、歩く人、というイメージが強い。何しろ散歩の達人。古所名蹟から横町裏通り、荒涼とした新開地まで縦横に歩きまわる姿は、『断腸亭日乗』やエッセイにもあざやかに刻み込まれている。

けれどそれに加えてもう一つ。私にとって荷風は、家の中の人、というイメージもけっこう強いのですね。しかも散歩の達人であると同じく荷風は、家の中でも達人。ただものではないのです。家の中の荷風の姿は、やはりきわだって意志的であり知的。つまりすぐれてスタイリッシュ。たとえば、家の中での或る日のこんな荷風のたたずまいには、思わず目が惹かれてしまいます。

黄昏長く暮れかぬる春の夕を見んとて、二階の欄干に立出候。処、昨今の暖気に早くも軒先に蚊柱立ち居り、夕風に組んづほぐれつ動き揺くさま面白く御座候。軒端にかゝる蜘蛛の巢は既に古き染模様となりたれど、蚊柱を図案に致せしものは未だ多くは見受けぬ様なれば、何か一ト工風致し雑誌の表紙意匠にでも致さば如何かと例の如く益なき事に心を費し申候。

四月一日

（『大窪だより』大正三、一九一四年）

この時荷風が暮らしていたのは、亡き父親から受け継いだ大久保余丁町よちようまちの邸。広い庭と邸の手入れが大変で、四年後に売り払うわけですけれど。最後の方は園丁も寄りつかず、荷風自身「気味わるき」（エッセイ『夕立』）と恐れるほど荒れ果ててしまったらしい。けれど荷風はこの家をこまやかに愛している。事情が許せば、もうしばらく住みつけかけていたかつたのにちがいない。

広い邸の中でも特に荷風のお気に入り、この二階の欄干あたり。ここはまさに彼が「益なき事に心を費」す場所であつて。夏の日盛り、欄干によりかかつて読書したり。庭の樹々の高い梢に小鳥が飛来するのを観察したり、壮麗な夕陽が近くの天神ノ森や空全体をすさまじく染め上げてゆくの恍惚と眺めたり。

さて、今は春の黄昏。荷風はぼんやり蚊柱（たぐさんの蚊が一かたまりになつて飛んでいて柱のように見える）を見て、あれやこれやそのデザイン化に思いをこらしているわけです。きらきら揺れては崩れる蚊柱、そしてたそがれ色。なんとも繊細な――。私はそんな荷風の姿から、色々なことを考えさせられてしまいます。

まず。こういう風に無為にゆるやかに家の中で過ごす自身の姿を、他の男の作家たちは書いていくか。書齋という、家の中の男性のとりでで懊悩したり勉強する姿は、森鷗外や夏目漱石も書いていると思うけれど。ここで荷風は勉強しているわけではありません。ぼんやり蚊柱を見つめているだけで。

大体こんな時間に、男の人が家に居るといふのも珍しいのでしようね。一般家庭だつたら、そろそろ男たちが勤め先から帰り始め、奥さま方は夕食やお風呂のしたくで忙しいはず。子供たちも泣き叫び、騒がしい、最もせわしない時間なのではないでしょうか。

そんなにぎやかな家庭の様子もよいけれど、ひとりものの荷風の家も、それに負けないくらい魅力的。しだいに昏くらくなつてきて、静かな家の中。自分一人だから、夕食の仕度なんかあるいはしなくともいいわけで。一日のうちでもつとも神秘的な美しく儂はかない時間に、荷風は思うさま身を浸しているわけです。

そしておそらく彼は、そんな時間を自分にもたらしめてくれる瀟灑しょうしゃな欄干をはじめさまざまな家のしつらいに、しみじみとした愛情を感じているに違いない。そういえば、家の軒先の蚊柱をデザインしようとする荷風の姿勢は、同じく身のまわりの草花や小鳥に発想を得、それを暮らしの中のデザインに活かそうとする英国の装飾芸術家、ウィリアム・モリスにちよつと似てはいはしませんか。

住む家に詩情を求め、己が生活思想の精髓を家や家具に注ぎ込もうとする姿勢も、二人は共通している。そんな問題も含めて、家の中の荷風の姿にこれからしばらく寄り添ってゆきたいと思いません。そのことによつて、《わが家》をととても大切にしたい人、その独身主義を活用して楽しく幸せなイエを作ることを先駆的に追求したある意味マイホーム主義の人としての荷風、その他もろもろを浮き彫りにしたいと思うのです。

家の中ではいつもひとりぼっち、なのだけれど、荷風はそこであまりにも多彩な姿態・表情を見せてくれて私たちを飽きさせない。だらしなかつたり、ちよつと子供っぽかつたり。あるいは可憐、時として凜然りんぜん。では口開くちあけに、バターのように溶けそうな、やわらかい荷風の夏姿をご紹介しますよ。
う。

盆過ぎてよりは炎天の日盛り歩むに苦しければ講かう積場しゃくばへもおのづと足遠くなりて、我家わがやの二階にかいの窓南みなみむき向むきの風入いりよきを幸さいはひとりず、独棲ひとりずみの家の中うちは、ゝかることなければひろく、と明け放ち唯午ご夢むをのみ貪むるに今年の夏ばかり蟬せみの声聞かねば、寢覚ねざめの手枕たまくら何となく異様の心地して、折々は遠く旅に在る如き思するもをかしかりけり。

〔築地草〕大正五、一九一六年

王朝風の美文にまどわされては、いけない。要するに昼下りの真白な時間、誰に遠慮もなく長い手足を投げ出してひたすらお昼寝中のオトコの姿が書かれているのだ。で、目覚めてしばしばんやり——へアレ、ここはどこだっけ？なんて思ってる。

この時荷風、三十七歳。いいのでしょうか。生き馬の目を抜く競争社会、外ではきつと、「黒い洋服を着た髭のある厳いかにめしい紳士」〔『紅茶の後』序〕たちが精力的に闊歩しているでしようのに。でもこのユルさやだらしなさは、現在の私たちの眉をひそめさせるようなものではない。むしろとて

も共感できる、やわらかな解放感。

たとえばこんな荷風の家の中と、田山花袋描くところの次のような家の中を比べてみたら、一も二もなく私たちは荷風の「我家」を選ぶのではないでしょうか。

……漸く洋燈ランプが光を放つた頃、其時分が一番侘しく一番暗かつた。生の荒涼から覚えた晩酌を母親はいつも遣るので、難しい顔は既に赤くなつて居る。皮肉な我儘な道理も何も無い小言が平生沈鬱な母親の口から迸るやうに出て、其矢面に主人あるじと若い嫁とが立たなければならなかつた。(中略) 田舎出の若い細君は飯も咽喉に通らぬといふ風で、勝手へ立つて行つて、顔を障子に押附けて泣くことなどもあつた。

(『生』明治四十一、一九〇八年)

陰惨な家だ。家族の中でいばつたり、いばられたり。オヤへの絶対的服従という前代の儒教道徳は色濃く残りながら、けれど一方その代償として父祖が代々子に保証してきた安定的生活基盤はすでに崩壊している。かつては家郷の大きなイエで何とか収められてきた複雑な係累の共同生活は、新しい二十世紀においては何と、「主人あるじ」が独力で確保する狭い貸家で営まなければならないのだ。

あるいは森鷗外の描くこんな家も、すさまじい。「昔の武家屋敷のような大きな開き門の、所々

に簾すだれのおろしてある窓のついた長い土塀どべいを囲かこらしてあつた」（小堀杏奴『晩年の父』岩波文庫）団子坂の邸の中では、実はこんな複雑な罫かけりや棘とげをはらむ日々が展開していったのだ。はげしく姑を嫌う「奥さん」と、優しく老母に仕えたいと願うその夫「博士」（鷗外と妻のしげがモデル）との確執の日々——。

日に何遍となく繰り返される、印刷したやうな奥さんの詞でも、たま／＼内にゐて、半日の間たて続つづに聞いてゐると、刺戟しげきが加はつて来て、脳髓のうずいが負担おんに堪へなくなつて来る。（中略）かういふ時博士の黙つてゐるのが、奥さんには又不愉快でならぬ。奥さんが「何とか仰おんやいよ」と肉薄して来て、白く長い指が博士の手首かちに絡かかんで来るのはかういふ時である。

（『半日』明治四十二、一九〇九年）

半日「内」に居ることは、まさに精神的拷問ごうもんのような。「脳髓のうずいが……」云々の言葉は、特に迫真せつしん。博士は「奥さん」の精神に異常があるのではと疑つてゐるし、いつか自分のそれも壊されるかもと恐れてゐるようだ。

『鷗外の遺産Ⅰ』（幻戯書房）には、妻のしげを「世界ヲ滅シ尽サナクテハ己マナイ魔王」（大正九年十一月十日、山田珠樹宛）とする鷗外の書簡が紹介されている。そういえば鷗外の作品には、静かにゆつくりと狂気に陥没かんぼくしてゆく人間を凝視するものが少なくない。そこには、家の中で日々「脳

髓」を傷つけられているという自身の恐怖が深くからまっていたのか……？

花袋や鷗外のみならず。同時代の島崎藤村や国木田独歩が描く家もみな、ことさらに重く濁った色を塗り込める昏い油絵のようで、荷風にはとても耐えきれなかったのでしょう。コワくてたまらなかつたのでは、こんな風景の中に飛び込むことが。既婚者たちのこんな家は、自分の身心を少しずつ潰してゆく重荷のよう。どうしてもつと自由で軽やかな、可憐な繭のようなイエをめざしてはならないのか。

そんな荷風の脳裏にまず浮かんだのが、日本文化における伝統的独身者——〈隠者〉の系譜と、彼らが結ぶ簡素な庵のイメージであつたのは当然の帰結です。

でも。隠者というと、現世のモノに執着しない、もちろん栖すまにも、という印象があるではありませんか。鴨長明は「程せばしといへども、夜臥す床あり、昼居る座あり。一身を宿すに不足なし」と、〈一間の庵〉に満足しているし。兼好はそれよりはつと、住居に積極的だけれど、でも「仮の宿りとは思へど、」と自らに釘をさしている。

しかし荷風はちよつと違うんですね。過去の世界を憧憬する一方、彼はバリバリの近代の申し子。快適さや利便性、清潔を重視する人ですもの、どうして自分の住む家にこだわらないでいられますよう。

なかなかウルサイのですし、自分が住むならあんな家、こんな家、……と折にふれ楽しく夢想もしています。それにまた、彼のエッセイはよく読むと、一種の住居論であるものも多い。家の構造

やスタイル、内部のインテリア、そこに住む人の匂い——も含めて、荷風は本当に〈家〉が好きな人なのだと思います。そんなことも追々考えるところ、そろそろ荷風の家の中へ戻りましょう。

これもやはり、夏の夕暮れ。荷風はヤブ蚊に刺されながら、アメリカでかつて出逢った懐かしい、けれどゆきずりの二人のフランス人のことを想い出している。ぼんやりと、縁側で。「淋しい孤独の生涯」を送った彼らの平静で強く淋しい生き方を、自分の身近に引き寄せながら。

自分は藪蚊やぶかの群むらに包囲くわいされながら、ぼんやり夏の夕ゆふの縁側えんがはに坐すわつてゐる時、唯何ただと云いふ事もなく懐なつかしく、異郷いこくで見知あつた彼の二人の異郷人の事を思返おもひかへす。二人の年とし老ひかへいた人達は、ベルナル先生ベルナルもマダム・デュートルも、決して自分のやうにどうする事も出来できない其その運命うんめいを愚痴ぐちらしく唧かきつてはゐなかつた。……

（『あの人達』明治四十四、一九一一年）

縁側えんがはとか外縁ウエランとか、欄干らんかんとか……。今の私たちの徹底して機能的な狭い家がそぎ落した、こういうアソビ心のある場所が荷風は好きなんだなあ。周囲の自然とゆるやかに結び合うそんな場所で、荷風は幾重もの時間の層を自分のまわりに張りめぐらし、その中に沈んでは浮かび上っている……。ではもう一葉、似たような情景を。こちらは麻布の偏奇館へんきかん。芝の増上寺から響いてくる鐘の音に包まれて、荷風は二階全体を柔らかな揺りかごのようにさえ感じている。そしてその音の醸かすうつ

とりとした眠気の中で、死んでしまった友人とひそかに言葉を交し始めたり。

住みふるした麻布あさふの家の二階には、どうかすると、鐘の声の聞えてくることがある。

鐘の声は遠過ぎもせず、また近すぎもしない。何か物を考へてゐる時でも、そのために妨さまたげ乱されるやうなことはない。そのまゝ考かんがへに沈みながら、静しずかに聴いて居られる音色ねいろである。又何なに事をも考へず、つかれてぼんやりしてゐる時には、それがために猶更なほさらぼんやり、夢でも見てゐるやうな心持こころもちになる。西洋の詩にいふ揺籃えうらんの歌のやうな、心持のいゝ柔やはらかな響である。(中略)

死んだ友達ともだちの遺著あしよなど、あわてゝ取出とりだし、夜のふけ渡るまで読み耽ふけるのも、こんな時である。

(『鐘の声』昭和十一、一九三六年)

荷風は家の中で、人より数倍もこまやかで複雑な時間を生きている。ひとりのためのシエルターとしてのその中には、このように生と死が親しく重なる不思議な時間の渦が起流しているのだ。

荷風の文学の一つの大切なテーマは、〈追憶〉。あらためて読みかえてみると、彼の追憶の文章の非常に多くが、家の中の無為のたたずまい(前述のように欄干にもたれたり、縁側にすわったり。あるいは炬燵こたつに当っていたり、ぼんやり紅茶を飲んだり……)の中から紡ぎ出されていることがわかる。

ひとり者、という住いは単に寝る場所。住いを疎略そりやくにしているというか、ひとり者に〈家〉なんてあるのか? と思う人さえ多いのでは。ところが荷風にはあるのですね、しつかりと〈家〉が

——物理的にも、心理的にも。荷風の文学の基盤は一つ、〈家〉にあるといつても過言ではないと思ひます。

それが証拠に、〈追憶〉が家の中で紡ぎ出されているでしょう？ それから。荷風文学を時に痛烈に、時に軽妙に彩る独特の批判精神も、家の中といういわば〈ウチ〉から、社会という〈ソト〉へと発信されている場合が少なくない。

たとえばそうした例としてもつとも印象的なのが、『花火』（大正八、一九一九年）という随筆です。明治四十三年の大逆事件検挙を嚆矢としてしだいに首をもたげ、以降の日本近代を席卷する国家主義の支配性と暴力性を指摘する、荷風の文明批判として有名なもの。

という、何か荷風が肩をいからせ大上段に議論しているようすを思い浮べますが、それどころか。ここで荷風は一心に、家事をしているのです！ 前から気になつてしかたなかつた、押入の壁紙張りを。ちなみにこの時の家は、築地二丁目路地裏の粹な借家。昼ごはんをすませた荷風は、手ぬぐいでキリツと袖を結び、糊のついた刷毛を手へ……。

午飯をすますとわたしは昨日から張りかけた押入の壁を張つてしまはうと、手拭で斜に片袖を結び上げて刷毛を取つた。

去年の暮押詰つて、然も雪のちらほら降り出した日であつた。この路次裏の家に引越した其日から押入の壁土のざら／＼落ちるのが気になつてならなかつたが、いつか其の儘半年たつて

しまつたのだ。

刷毛を動かす荷風の耳にしきりに花火の音が響いてきて、否応なく「今日は東京市欧州戦争講和記念祭の当日」であることを思い出させられる。その音に誘われて荷風の脳裏に浮かんでくるのは、幼年時から今まで見聞きしてきた幾多の記念祭や暴動の、殺伐と恐ろしい風景ばかりだ。そしてそんな時いかに官憲が、人民を踏みつけにふるまうことか。東京市民がいかに、日頃抑えこんでいる暗い劣情と差別意識を爆発させることか。

ゆえに皆が花火に浮かれて広場へと出払うこの休日、荷風は家を離れない。自分にとって大切なのは、ウチにおける日常の営みとばかり、淡々と刷毛をふるいつづけるのだ。だから一連の諷刺や批判は、もぐり込んだ押入から発信されたもの、と言える。『花火』のエンディングも、次のとおり。

花火は頬に上つてゐる。わたしは刷毛を下に置いて煙草を一服しながら外を見た。夏の日は曇りながら午のまゝに明るい。梅雨晴の静な午後と秋の末の薄く曇つた夕方ほど物思ふによい時はあるまい……。

オトコの人が家事をしながら、強大な国家権力を批判する——そんなスタイル、当時皆無と思う。